いつわって？カレカノ！

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつわって？カレカノ！

【Ｎコード】
Ｎ０１７５ＢＡ

【作者名】
レオ

【あらすじ】
よくモテる圭吾と音々が偽り彼かのに？！
二人は幼馴染、おまけに音々なんて男勝りすぎて
もう周囲は混乱？！
ドキドキッバタバタッのラブコメディーっ！

＊第１話＊

「あ、あの・・・！ボクと付き合ってください！」
「・・・・・」
世の中、不吉なものだよな。
なんだって、あたしは今一度も会話したこと無い男子に
告白なんてされてるんだろう・・・。
「あの・・・君、誰？」
「あ！えと、僕は、２Ａの本田と言います！」
「本田・・・君・・・（？）」
いや、まじで誰。
２Ａって・・・かなりの賢いお方がいらっしゃるクラスだよな。
「・・・ごめん、知らないし興味ないし、なんか、ごめん」
我ながら酷いとは思うけどさ、こういう振り方じゃないと
あきらめてくれないだろ。多分。

あたしはスタスタと自分の教室に戻る。
今は放課後。そしてあたしは日直。
あぁ、だりぃ。んでもって・・・
「寒い！」
今月は冬まっさかさりの１１月。
そして今は１１月下旬。
はぁ・・・はやく学校おわんねぇかなー。

ここは公立森羅学園。
そこの２Ｄ生徒、井上音々（いのうえねね）。
成績は２Ｄの中では上のほうの人材。（それでもほぼオール３）
所詮は２Ｄ。一番アホのクラスだから、しゃぁないわな。

教室の前まで来ると、中から話声が聞こえた。
『あ・・・あの・・・圭吾君！』
『こんな放課後にどーした？』
圭吾？と・・・誰だ？
『わ、わたしと！付き合って、くれませんか？』
また可愛い声の子女の子だな。
多分２Ａ？Ｂ？Ｃ？の女子だな。つか・・・２Ｄに女子いねぇしな・・・うん・・・。
『んーごめん、俺今そういうの興味ないんだわ。ごめんね』
『えと、じゃ、じゃぁ！お友達・・・から・・・』
『ごめん、俺お堅い女の子とはあわねぇの。』
『え、でも・・・！』
『もういい？俺、課題のこってんだ』
『・・・圭吾君のバカ！』
そういう声とともにドアがいきなり開いて
その告白をしていた女子は去っていった。
あたしは教室に入って、圭吾に声をかける。
「これまた酷い振り方だな」
「あれ。聞いてたのか？」
「まぁね。あたしもさっき告白されたばっかりだから。」
「お前もまたなんだな。で？結果は？」
「もちろんふったっつーの」
「だーよなー。てか、お前の振りかたもどうせ大概だろ」
「まだましだろ。『ごめん、知らないし興味ないし、なんかごめん』って言って
帰ってきただけだから大丈夫だろ」
「いやいや、かなり酷いと思う。俺ならなくぜ？」
「しらねぇっての。はぁ・・・告白なんてもうまっぴらごめんなんだけどー。」
「だーよなー・・・あ、俺！ちょっといいことおもいついた！」

「は？なに？」
あたしは自分の席について、頼まれた資料閉じをはじめる。
「俺ら、付き合おうぜ！」
「・・・はぁ？」
「大丈夫。い・つ・わ・り！の彼かの！だからさっ」
「・・・はぁ・・・？」
「え、きにくわねぇ？」
まぁ・・・そりゃ気に食わないけど・・・
だって、幼馴染の圭吾とあたしが付き合う（いつわりでも）とか
なんか、気がひけるんだよなー・・・
いやまぁ・・・でも、適作かもしれないな・・・
「よし。のった。これで断る口実ができるもんな」
「よーっし！決定！俺らは偽り彼かのっ」
「よろしく！」

こんな感じでできた偽りカレカノのあたしたちの関係。
相手は幼馴染の森羅圭吾（しんらけいご）。同じく２Ｄのアホ。
てか・・・
「ちょ・・・とにかくさむいんだけど・・・」
「課題終わらせてさっさとかえろうぜー」
「だなー・・・。って、あたし課題じゃないし！お前だろ」
「まぁまぁ。」

＊第2話＊

次の日。
あたしたちはいつもどうり二人で登校。
まぁ・・・家が隣だから仕方が無い事だと思う。
だって、家から出るタイミングまでも一緒なんだよ・・・？
「ういーっす、おはー」
「おはよー。ふぁ・・・眠い・・・んでもって寒い。」
「お前昨日から寒いばっかいってんじゃん。大丈夫かよ」
「まぁ・・・大丈夫なんじゃね？多分ー」
「ま、ならいいけど。てか、その男口調いい加減直せば？」
「はぁ？んなだること、なんでしなきゃなんないの」
「いや、なんとなく。あー、なんでんなの好きになるのがいるんだか」
「うっさーい。圭吾だってわっかんねーよ」
「まぁな。おっ・・・と。俺らそういえば恋人同士なんだっけ？」
「あぁ・・・そういえばそうだったな。普通にしてればいいよな？」
「んー・・・それじゃだめなんじゃね？」
「えー。じゃぁどうすんの」
昨日まで幼馴染だったやつとカレカノの振りでもしろって言われて誰ができるんだ。そいつ今すぐ俳優に売れ、って話だよ。
「こういう感じじゃね？俺前付き合ってたときこんな感じだった」
そういうと、圭吾はあたしの手を取って指を絡めた。
ゆわる、手をつなぐと言う恋人らしい行為。
「へぇ・・・。あたし付き合ったことないからわっかんねー」
「だよなー。所詮音々だもんな。所詮。」
「うっせー、ほら、学校近づいてきたぞ」
「恋人らしく・・・って言ってもさらっとな、さらっと」
「別にいつもと普通にしとけばいいんだろ？あたしは。」

「まぁな。俺が誘導するから心配すんな」
「・・・信用はできねーけどまぁ、信用してやるよ」
「うわ。かわいくねーの」
「前からだっつのー」

門をくぐり、教室に向かう。
さすがに周りの視線がかなり刺さる。
まぁ、そりゃそうだろう。
この学園のＮｏ１にモテてる男女が手つないで歩いてんだよ？
そりゃみんなこっち見るだろ。
ちょいちょい聞こえる周りの声にあたしはイラッとした。
「なによ、あいつ。圭吾君と手つないじゃって！」
「圭吾くんも圭吾君よ！昨日あたしを振っといて・・・！」
あぁ・・・昨日ふられた女子か。
ご愁傷様でした。
こっちは男子の声。
「圭吾のくせにして・・・！なんで音々と！」
「２Ｄの大事な女子なのになぁ？！」
なにか大事な女子だよ。
いつも手荒に扱うくせに。
「なぁ、走っていい？」
「は？」
「あたし今すぐにでもこの状況から逃れたいんだけど。」
「あぁ、まぁ俺もそれは一緒だ。んじゃ、走るか」
ダダダダッと走っていくあたしたちを回りは呆然とみていた。
どんだけものめずらしいんだよ。

教室に入ると、いきなり男子たちに囲まれる。
「お前ら付き合ってんだって！？」
「告白したのは音々とか！」

「初キスはもうすんだとか！」
「なんだよーっ！じゃぁＨもおわったのかぁ？！」
「てかいつからつきあってんだよーっ」
・・・・・・。
どっからんな噂が回った。
誰だ。回したやつ。
いますぐぶっ飛ばす・・・
かなりプッチンきてると圭吾が耳元で
「切れるな。俺もかなり我慢してるから。」
と言い、男子たちの話にあわせた。
「そうだよ、付き合ってんの。まぁ幼馴染だしなぁ？」
「告白はどっち？」
「残念ながら音々じゃなくて俺だよ」
「初キスは？！したのか？！」
「まだだよ、あほか。昨日付き合い出したのに」
「じゃぁＨもまだ？」
「・・・てめぇぶっ飛ばすぞ？」
ケラケラと笑いながら席に着く圭吾を見て
あたしはため息をつく。

どーやったらあんなけ気楽に生きられんのか。
さっぱりわかんねぇの。

頬杖ついてぼーっとしてると、不意に頭の上から声がした。
「ねぇ、ほんとに付き合ってるの？」
この声は・・・昨日の圭吾に告白してた女子か。
「ほんとだよ」
「じゃぁ証拠みして」
「はぁ・・・？」
「付き合ってる同士なら、キス、できるでしょ？」

・・・この女、なにいってるつもり？
キス？圭吾と？
は・・・んなのありえないんだが・・・
「ねぇ？圭吾君。」
うわ。わざとらしい。
「っ・・・・できるにきまってんじゃん？」
一瞬つまったものの、圭吾は普通に答えた。
いや・・・できないだろ。
つか・・・あたしその場合ファーストキスは圭吾ですか？
「じゃあ、いまやってよ。」
「わぁったよ」
圭吾はかったるそうにこっちにきて
あたしの耳元でささやいた。
「ファーストキスいただきます？」
うわ・・・腹立つ・・・
てか・・・いつわりの恋人なのに
ここまでしないといけないんだ・・・？
そんなこと思ってると、目の前に圭吾の顔がきて
唇に体温を感じた。
ファーストキス・・・ね・・・・。
圭吾はきっとファーストキスなんかじゃないんだろうけど。
ま・・・所詮あたしだしな。
いつのまにかキスは終わっていて
周りの男子は唖然としていて
もちろんいいだしっぺの女子も唖然としていた。
「ほんとに・・・したの・・・・」
「やれっつったのだれ」
「・・・圭吾君のバカ！」
その女子は教室を出て走り去っていった。
「・・・おれ二日連続でバカっていわれたんだけど。」

「まぁ、所詮圭吾だししゃぁないだろ」
「なっ・・・しっけいな。」
「あらごめんあそばせ、本音がでてしまったわ」
「きもちわりぃ」
「・・・・・・」
正直今のあたしに女口調てのはわっかんね。
でもいつか、女口調になってみたいかも・・・。
「どうした？」
「いーや、なんでもねぇよ」

＊第3話＊

時間は淡々とすぎて、もう４時限目。
４時限目はあたしの大嫌いな英語。
基礎の英語は覚えてるものの
ほかの英語なんてなにがなんだかさっぱりなんだよ。
「ふァ・・・眠い・・・」
ちらっと圭吾を見ると、すでに爆睡・・・。
いや、はやすぎんだろ、あいつ。
あぁ・・・でもあいつ3時限目の数学から寝てたっけ？
まぁどーでもいいんだけど。

英語の先生はかなりお人よしで
寝てるやつがいようと、落書きしてるやつがいようと
起こさない。お人よし・・・っつーか弱い？
「えーっと、じゃぁ、これを訳してもらうのは・・・
音々ちゃん！お願いします」
「えーっと・・・わかりません、すみません。」
「あらあら、いいのよ。これはね――」
この人はどこまでお人よしなのだろうか。
少しぐらい怒ればいいのに。
そんなことを考えてる間に
チャイムはなり、昼休み。

「圭吾、学食の特製たっぷりイチゴパン売り切れんぞ？」
「ん・・・は！やべぇぇっ！！！」
全速力で教室を駆け抜け、圭吾は売店に向かう。
はぁ・・・あたしも今日は弁当ないんだよな・・・
「だり・・・つかさみ・・・」

トコトコと売店に向かおうと廊下を歩き出した時だった。
「ねぇ？あなたがぁ井上音々ぇ？」
目の前にあられたのは、これほどブリブリしたやつはいないであろう変質者・・・じゃなくて、ブリブリした女子がだっていた。
「はぁ・・・。あたしが井上音々ですが、なにか？」
「あなたぁ、圭吾くぅんとぉつきあってるんですってぇ？」
・・・んだよ、またこうゆうやつらかよ。
だりぃ。うっとうしい。
「そうだけど。」
「ふぅ～んぅ・・・。どぉせぇ、あなたがぁむりやりぃやったんでしょぉ？」
「は・・・？」
「そぉんなんだったらぁわたくしにぃけいごくぅんをぉゆずってもらぇなぁい？」
・・・ユズル？ゆずる？譲る？謙？
「ゆずるって・・・なにが？」
「だぁかぁらぁ～圭吾くぅんをぉあたしにちょぉだぁいってことぉ」
「いやだから・・・」
あたしが言おうとしたとき、不意に後ろから声がしてがばっと抱きつかれた。
「てめぇみたいなんに誰がいくかよ。ばっかじゃねぇ？」
「？！」
圭吾だ。後ろから抱き着いてくるのはよくあるけどさすがにこのタイミングはびっくりした。
「圭吾くぅ～ん♪」
「きもい、ちかよんな、ブス」
「なっぁ・・・？！そ、そんなことぉ言っていいっておもってるのぉ？」
「うん、余裕で思ってるけど」

「ふぅ～ん、まぁ？あたしはわぁ、この学校にいられないことをぉおもっておくのねぇ」
「へ？なんで？え、もしかしてお前のおかんが権力持ってるからと言う
どうでもいい？口実？え？だったらかなり無駄だよな。」
「な、なぁんですぅってぇ？」
「だって、俺、理事長の息子だし。」
「はっ・・・・！」
今気づいたのか、この女子。

そう、圭吾はこの森羅学園の理事長、森羅初世（しんらはつせ）の息子。
まぁ、＝だな。圭吾はかなりの権力者ってわけだ。
時期理事長ってわけじゃないらしいけど。（圭吾の頭じゃ理事長なんてつとまんねぇしな）
「じゃ、じゃぁわたくしはこれで・・・」
「ブス、これで終わると思うな。」
「ひっ・・・！」
そのブリブリ女子はものすごいスピードで去っていった。
「モテる男はつらいな」
「・・・お前も気をつけろよ」
「は？なにを？」
「なんでも。とにかく気をつけろ」
はぁ・・・？
なにを気をつけろと？
まぁ・・・圭吾が言うんだし・・・
「ん・・・了解」

＊第４話＊

「やべ・・・売店いきそびれた・・・」
変なブリブリ女子に引き止められたせいで
売店はいきそびれてしまった。
外のコンビニでもいくかぁ・・・？
「ん、これ。」
そんな短い言葉とともに
圭吾が隣からマヨパンを差し出してきた。
「え？いいのか？」
「音々のために買ってきたんだし」
「ラッキーッ！圭吾まじ好きだぁ～」
そんな恋愛感情なんてものは１滴も混ざってないけど
周囲からはひやかしの声がした。
「ラブラブだね～」
「さすが幼馴染～！」
「くぅ・・・！圭吾にぬかされるとはなぁ」
・・・・。
なにがラブラブだ。
さすが幼馴染って・・・
なぜさすがなのか？
そんなことを思っていると、ポケットで
ケータイが震えた。メールだ。

件名：津田です。
本文：放課後体育館裏に来てください。
大事な用があります。

はぁ・・・また告白かなにか？

ま、断る口実はあるわけだし・・・
てか、こんだけ噂広がって、よく告白なんてできるな？
「どうした？」
「また告白の場所掲示メール」
「え？まじで？」
「うん、まじで」
「・・・行くな」
「は？なんで」
「・・・っつ！トイレェェェ！」
圭吾はあたしの質問には答えず
トイレに疾走していった。
「？？」

放課後、体育館裏にあたしは行った。
行くとそこには誰もいなくて
シーン・・・と静まり返っていた。
「呼び出しといていないとか・・・」
ありえねぇにもほどがあるんだけど。
そんなことを思ってると、不意に後ろか人の気配をかんじた。
ぱっと後ろを振り向くと、そこには誰もいなかったが
さっきまで前を向いていた方向から人の声がした。
「音々さん、来てくれたんですね」
そっちを向くとそこには、かなり長身の男子が立っていた。
んー・・・余裕で１８５超えか・・・
「呼び出されたしな」
約束は守るのがあたしのルール。
「おれ、べつに音々さんをだましたいわけじゃないです」
「は？」
いきなりわけのわからないことを言われて
おもわず思ってることを口に出してしまった。

と、いっても「は」だけだけど。
「けど・・・圭吾さんと付き合ってしまっていた以上
俺にはもうこんな方法しかないんです」
「いや・・・だから、なに・・・？！」
最後までは言わせてもらえず
後ろから誰かに口を押さえられ
あたしのまぶたは重くなり
閉じたくもないまぶたを、閉じてしまった。

＊第5話＊

「ん・・・・」
目を開けると、そこは何処かの倉庫らしきところだった。
そういえばあたし眠らされたんだっけか。
はぁ・・・めんどくせー・・・
今の状態は最悪だ。
口もテープで閉じられてるし
手も手錠をかけられていて
足もロープで縛られている。
とりあえずあたしは、周りを見て
この手錠を解けそうなものをさがした。

ねじでも針金でもなにかあれば解けんだけど・・・
端っこのほうにねじがコロンと落ちていた。
ちっこいけど・・・まぁ、だいじょうぶか。
カチカチカチと手錠の鍵の差込のところを探る。

――――――カチッ

「んー・・・ん・・・（よー・・・し）」
手錠が解けてあたしは、テープとロープをそそくさと外した。
と、同時に倉庫のドアが開く。
「あれ・・・といちゃったんですか？」
「あぁ。あれ、息苦しくてな。ＳＭプレイにはちときつすぎんじゃね？」
「そうですか、すみません。でも、もう一度あの状態になってもらいます」
「は？いやにきまってんじゃん」

「無理です。・・・圭吾が来るまで、無理ですよ」
ニヤリと笑うこいつになにか違和感を感じた。
あ・・・・
「お前、もしかしてあの、えっとー・・・圭吾に告白した女子のー・・・」
「そう、元彼だよ。圭吾は俺の憎き相手。音々さんと付き合ってるなら
愛する彼女を助けにこないわけないでしょう？だから、そこをビリビリッとやるわけです」
・・・バカだ、こいつ。
圭吾がそんな単純にやられるわけもないし
第一、あたしたちは偽りのカレカノ。
助けにくるはずもない。所詮、幼馴染だ。大好きな、友人、親友だ。
「てか・・・圭吾なんていらなくてもあんたぐらいなら
あたし一人で十分だけど？」
あたしは手をポキッとならせる。
「さすがに、先輩だからと言って負けませんよ。女なんかに」
「あたしを女だと思ってる時点でお前の負けだ。」
その言葉の終わりと同時にあたしはそいつの溝に思いっきり蹴りをいれる。
その足をつかまれるものの、思いっきり振り払い、一回宙返り地面に着地した。
「っ・・・」
あたしはすぐにしゃがみこむそいつの上に行き、足を上げる。
「いい？頭に、一発入れても？」
「・・・入れてみろ。入れればいいじゃねぇか！」
「と・・・・。ごめんだけど、あたし後輩をいじめる趣味はねーの」
足を下ろして、あたしもしゃがみこむ。
「あたしのケータイ、どこ？」
「・・・はい。」

そいつは自分のポケットからあたしの黒のケータイを取り出す。
それを受け取ってあたしはただちに圭吾に電話をかけた。
『もしもーし？音々、どうした？』
「ちょっとあんたに用があるかわいい後輩がいんだけど
今これる？えっとーここは、ＯＯ工場近くの第２倉庫だと思うんだけど」
『ん、わかった。んじゃ』
「じゃね」
プチッ
「音々さん・・・何してるんですか・・・？」
「圭吾よんだだけだけど？」
「は！？な、なんでんなこと！」
「あんた、圭吾の話たかったんだろ」
「・・・・そうですけど。それ、俺にしか利益なくないですか？
もしかしたら殴り合いの喧嘩になりますよ？」
「大丈夫。殴り合いの喧嘩はぜってぇあんたが負けるから。」
「・・・・・」

５分ぐらいして、圭吾が倉庫に「しっつれーい」と言って入ってきた。
どこまでもお気楽なやつだ。ほんとに。
「んで？俺と話したいやつって？」
「そこにいるやつ」
「あれ、津田じゃん」
「どーも・・・圭吾先輩・・・」
「え、なに？俺に用って？」
「・・・なんで、真知子振ったんだよ・・・」
「へ？」
なんつーすっとんきょうな声だ。
「なんでってきいてんだよっ！」

津田ってやつが放ったこぶしを圭吾は普通に片手で止めた。
そして、そのこぶしをつかんで思いっきり投げとばす。
「いってっ・・・」
「真知子ってやつ、お前のかのじゃねえの？」
「・・・もとかのです・・・」
「おれ、あいつがよく図書室にいんのしってたけど
ずっと窓からサッカー部の試合のぞいてほほえましそうにしてたっての」
「・・・そう・・・なの・・・か？い、いや、でも、それは俺を見てるんじゃなくて・・・」
「あんたをみてたんだよ、多分。だって、圭吾は今足壊してて試合には出てない」
「・・・・。わけ・・・わかんね・・・！」
「まぁ、もういちど真知ーこ？だっけ？って人に気持ちつたえるんだな」
「俺にほれたのは多分なにか八つ当たり的な感じだったんじゃね？」
「そんじゃ。いちいち拉致していただきありがとうございました」
あたしはたったかとたからかに倉庫を出て行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0175ba/

いつわって？カレカノ！

2012年1月2日03時49分発行